

弘一法師（李叔同）と日本

——清末から民国期の中日文化交流の一例として——

大野 公 賀

近代東アジアにおける西洋文化の受容は、同地に新たな思想と事物をもたらした。しかし一方、そこには外圧による強制的な近代化であるが故の諸問題が付随していた。そうした中、日中両国はそれぞれ如何なる自己形成を行い、また葛藤を余儀なくされたのであろうか。日本においては、自らは近代的国民国家の形成を志向しつつも、他のアジア諸国にはそれを認めず、隷属を強制することとなった。一方、中国では近代化実現のための方便として、中国の植民地化を進める日本に範を仰がねばならなかった。その間、日中両国の間では様々な交流がなされたわけであるが、小論では清末から民国期の中国と日本の文化交流の一例として、日本への留学経験をもつ高僧、弘一法師（一八八〇—一九四二…法名釈演音、俗名李叔同）を取り上げ、その思想と活動について考察したいと思う。¹⁾

弘一法師は南山律宗中興の第十一代祖師として知られているが、一九一八年に出家するまでは近代中国における西洋の芸術・文化受容の草分け的存在として活躍していた。その突然の出家は中国の文芸界、思想界に衝撃を与えた。かつて梁啓超は「清末思想界の底流にあったのは仏学である。（中略）清末のいわゆる新学家で、仏教と関係をもた

ない者はほとんどいない」と論じたが、十九世紀半ば以降、仏教は康有為や譚嗣同、章炳麟、嚴復ら新思想家の間で盛んに研究された。彼らの思想には仏教の影響が見られ、また仏教に関する著作や論文も少なくなる。民国期には『仏学叢報』（一九二二—一九一四）や、現在も続く『海潮音』（一九二〇—）などの仏教雑誌が刊行され、僧侶の他に章炳麟や梁啓超ら、仏教居士も多数寄稿している。外圧による近代化を余儀なくされた当時の中国において、仏教哲学は一種の精神的支柱あるいは理論武装の手段として流行したのである。

しかし、それはあくまでも思想としての在家仏教であり、李叔同のように実際に出家する者は極めて稀であった。李叔同が出家した一九一〇年代後半、中国では五四新文化運動を経て、芸術教育が興隆し、西洋の芸術や文化への期待が高まっていた。そのような折、最初期に日本で西洋美術や音楽、演劇を学び、当時の中国の文芸界に新たな刺激と変革をもたらしうる存在と考えられていた李叔同が、中国の伝統的な価値観を再評価する方向へと回帰したのである。それが文芸界、思想界に与えた驚きは如何ばかりであったろうか。李叔同は言わば一九一八年を境に、それまでの西洋芸術・文化の世界から伝統仏教の世界へと大きく身を翻した訳であるが、近代中国の芸術・文化史および仏教史の双方に彼の残した足跡は計り知れない。

しかし中国において、李叔同・弘一法師に関する研究が本格化するの是一九八〇年代後半以降のことである。その契機となったのは一九八二年に制定された現行の「中華人民共和國憲法」である。宗教の自由については、それ以前の一九七八年憲法でも認められていたが、同憲法では同時に「宗教を信仰せず、無神論を宣伝する自由」も保障されていた。一九八二年憲法では、この「無神論を宣伝する自由」が削除され、「信教の自由」についても詳細に規定された（第三六条）。こうして宗教信仰の自由が明確に保障され、刑法的にも保護を受けるようになったことで、弘一

法師ならびに出家以前の李叔同に関する研究も公然と行えるようになったのである。⁽³⁾

従来の研究では、主として出家以前の西洋芸術・文化の受容と普及、あるいは出家後の仏教の護持と伝播について、それぞれ個別に論じられることが多かった。日本との関係についても、出家以前すなわち李叔同としての活動にのみ焦点が置かれ、出家後についてはほとんど論じられていない。小論では、これまでほとんど論じられることのなかった、弘一法師と日本との交流についても併せて論じる。それによって、弘一法師の仏教護持および伝播のための諸活動は、決して出家以前の西洋芸術・文化の受容や普及のための活動と完全に断絶している訳ではなく、そこに何らかの関連性が存在することが明らかに出来るのではないかと思う。

一．日本留学以前（一八八〇年—一九〇五年）

はじめに李叔同の経歴について簡単に述べておきたい。⁽⁴⁾ 幼名は成蹊、一八九七年に学名を文濤としたが、その後も広平、哀、岸、息、嬰など度々改名している。叔同は字で、他にも息翁、俗同、黄昏老人などがある。原籍は浙江平湖で、天津の裕福な塩商の家庭に生まれた。父の李世珍（字筱楼…一八三—一八八四）は進士で、吏部主事を拝命したが、間もなく官を辞して家業に励み、晩年には金融業も営んでいた。晩年は仏教を深く信仰し、慈善事業にも熱心で、天津の名士として名高い存在であった。李叔同が五歳の時に父が死去し（享年七十二歳）、その後は第三側室であった母王氏（一八六〇—一九〇五）に育てられた。七歳から科挙のための勉強を始め、一八九七年、一八九八年には「童生（文章）」⁽⁵⁾として天津県儒学を受験している。

この頃から、天津の名士で文化人としても名高い趙元礼（字幼梅、一八六八—一九三九）や唐敬巖らに填詞や篆刻を学ぶなど、伝統文化に深い関心と才能を示す一方で、西学的重要性を認識し、英語の勉強も始めている。また当時、康有為の思想に賛同し、自ら「南海康君は吾師（康有為先生は我が師なり）」との印を作成したという。戊戌の政変により康有為らが日本に亡命すると、李叔同も禍の及ぶのを避け、一八九八年に母や妻子とともに上海へ移住した。

上海では許幻園（一八七八—一九二八）らの主催する文学社団、城南文社に参加した。同社では毎月課題が出され、程朱学派の張孝廉がその優劣を審査していたが、李叔同の作品は高い評価を受け、同社の主要メンバーである許幻園、袁希濂（字仲濂、？—一九五〇）、蔡小香（一八六二—一九二二）、張小樓（一八七七—？）と「天涯五友」の契りを結ぶに至った。彼らは詩賦のみならず書画にも優れ、一九〇〇年には張小樓が主催、李叔同と許幻園が副総理となつて上海書画公会を組織した。同会は「風雅を提唱し、文芸を振興すること」を趣旨としており、週に二回『書画公会報』を出版し、多くの名家の書や篆刻、絵画を紹介した。⁽⁷⁾

一九〇一年八月、李叔同は上海の南洋公学特班に入学し、同校総教習の蔡元培（一八六八—一九四〇）に師事した。同級生には中国共産党発起人の一人で、柳亜子らとともに南社に創設に関わった邵力子（聞泰、一八八二—一九六七）や、北京大学校長や北京政府総長などを務めた胡仁源（一八八三—一九四二）らがいる。職業教育の推進者としても著名な黄炎培（字任之、一八七八—一九六五）も同級生で、南方出身のため標準語の不得手な黄炎培は同級生数名らとともに、天津出身の李叔同に標準語を習ったことがあり、李叔同は常に温和で静粛であつたという。⁽⁸⁾ 蔡元培の日記には、南洋公学の学生の成績が記録されているが、それによると李叔同（学名広平）は入学当初、百点満点中九五点、三五名中三位と好成績を収めている。その後は九月七五点、一〇月七五点、十二月六〇点と下降し、平均点は七六・

二点で第一三位であった。また蔡元培は別の資料でも、南洋公学の学生のうち上位十位までの学生の名前を残しているが、李叔同は二番目に優秀なグループ（上位六～一〇位）の一人に挙げられている。⁽⁹⁾

南洋公学とは、清末洋務派の盛宣懷が人材育成こそが国家衰興の鍵であり、そのためには教師の質的向上と初等教育の普及が不可欠であるとの考えから一八九六年に創立した学校で、現在の上海交通大学の前身にあたる。日本の師範学校をモデルとしており、設立当初は師範学院（師範学堂）・外院（付属小学校）・中院（中学校）・上院（高等専門学校）の四部門から構成されていた。⁽¹⁰⁾ 李叔同が入学した特班とは、同校監督の沈曾植（字子培、一八五〇—一九二二）の提案により一九〇一年に開設された特別クラスで、受験生には中国の伝統的な学問の素養と西学への志が求められた。沈曾植は康有為や梁啓超による強学会の設立者の一人である。特班は一学年四〇名程度で、成績優秀者には経済特科への推薦が保障されていた。⁽¹¹⁾

経済特科とは、変法維新運動の共鳴者である嚴修（字範孫、一八六〇—一九二九）が、一八九七年に奏請して始められた科挙の特別コースである。嚴修は天津出身の進士で、翰林院編修や学部侍郎などを歴任し、経済特科の開設を上奏した際は貴州の教育を管理監督する学政であった。嚴修はその上奏文で、従来の科挙とは別に内政や外交、算学、法学、翻訳、測量などの分野の優秀な人材を、身分や経歴に関わらず無試験で推薦する制度を設け、特に優秀な者は採用して、通常の科挙制度を経て仕官した者と同等に扱うべきよう陳述した。⁽¹²⁾ 経済特科は「経済（経世済民）」という言葉に象徴されるように、「時務と西学とに通暁する人材」の破格の登用を目的としており、科挙改革の一環として開設が検討された。⁽¹³⁾ 嚴修の上奏は光緒帝の採用するところとなり、一八九八年には経済特科の開設が認められた。⁽¹⁴⁾ しかし戊戌の政変により、計画は頓挫した。一九〇一年に開設された南洋公学特班では、成績優秀者の経済特科への

推薦が保障されていたが、これは光緒新政の教育改革に乗じたものと考えられる。

南洋公学特班はまさに五十嵐正一の指摘するように、中体西用論に基づいて新しい人材の育成を目的としつつも、実際には科挙制度と深く結びついており、「改正による新しい科挙の網目を通過させた上で、その新教育による修学者を官界に送り出し、国政に参与させる」という特殊な使命を帯びていたのである。⁽¹⁵⁾こうした性質から特班の学生には、入学時に生員（秀才）やその一段階上の挙子である者も多く、在学中に郷試を受験する者も少なくなかった。⁽¹⁶⁾

読書人の家柄に生まれ育った李叔同にとって、科挙の受験と国政への参与は言わば自明の事柄で、南洋公学に進学した翌年の秋にも浙江郷試を受験している。結果は不合格で、その後も引き続き南洋公学に在学した。⁽¹⁷⁾李叔同が南洋公学特班への進学を決意した理由として、同校が李叔同の私淑する康有為の友人や信奉者による設立であることに加えて、成績優秀者には経済特科への推薦が保障されていた点は見逃せない。そして、その経済特科の開設を主張したのが、李叔同の詩や書、篆刻の師である趙元礼や唐敬嚴の親しい友人、嚴修であることは、果たして単なる偶然なのだろうか。嚴修と李叔同の交際がいつ頃から始まったのか、詳細は未詳であるが、少なくとも趙元礼や唐敬嚴を通じて、李叔同が嚴修の革新的な主張や経済特科開設の動きについて、早くから耳にしていたであろうことは想像に難くない。

しかし、一九〇二年の冬に中国で最初の学生運動として名高い「インク瓶事件」が発生し、南洋公学の全学生が退学処分を受けるに至り、李叔同も退学を余儀なくされた。また、これに乗じて蔡元培を思想的に非難する声⁽¹⁸⁾が上がり、蔡は責任を取って辞職した。

さて、これまであまり論じられてはいないが、李叔同が蔡元培の指導で学んだものの一つに日本語の読解がある。

蔡元培は日本語読解を学ぶことの意義を次のように唱え、学生にも推奨した。

今後、学問を志す者は世界レベルの知識を持たねばならない。世界は日々進化し、事物は日々発明され、学説は日進月歩で変化している。洋書を読もうにも、書籍代が高く、一般人には手が出せない。日本では洋書の翻訳が盛んで、しかも安価である。日本語の書籍が読めれば、世界の新刊書はすべて読めるも同然である。日本語の会話については、仮に将来日本に留学するならば、それから勉強しても遅くはない。⁽¹⁹⁾

蔡元培自身が日本語の学習を始めたのは一八九七年一〇月のことであるが、その目的はまさに上述の通りで、蔡元培は当時の日記に次のように記している。

王式通（号書衡）が来る。東文学館の設立を計画する。洋書は高く、また主要な洋書はすべて日本で翻訳されているので、日本語に通じれば、いろいろな洋書を読むことが出来る。しかも西洋の言語は解るようになるまでに数年が必要だが、日本語は半年でよく、極めて簡単である。陶大均（字杏南）に手紙を出して、詳細を尋ねる。⁽²⁰⁾

文中の東文学館とは、東文すなわち日本語を学ぶための学校である。当時の情勢を反映して、一九世紀後半から二〇世紀初頭には日中両国で中国人のための日本語学校が次々と設立された。設立者は中国人（私立・官立）、日本人（個人・団体）、中日共同など様々で、地域も北京や上海のような大都市だけではなく、全国各地に設立された。蔡元培は上記のように早くから日本語学校の設立を検討しており、蔡元培が劉樹屏らと一八九八年六月に北京で設立した東文学館は、羅振玉と汪康年の上海東文学社（同年二月設立）に次ぐ、中国で二番目の日本語学校である。⁽²¹⁾同校で蔡元培らに日本語を教えたのは、文中に名前のある陶大均（一八五八—一九一〇）である。陶は清国政府が駐日公使館内に開設した東文学堂の第一期生で、一八八二年から一八九四年まで日本に滞在し、公使館で日本語の通訳・翻訳に従

事した。

蔡元培の熱意に応じるかのように、南洋公学特班の学生は全員、日本語の読解法を学ぶようになった。⁽²²⁾ その方法は「日本語を勉強することなしに、日本語で書かれた書物を強引に読むという不徹底」なものであったが、「何日もしないうちに、誰もが日本語が読めるようになり、本を翻訳する者もいた⁽²³⁾」という。李叔同もその一人で、退学後の一九〇三年三月には玉川次致著『法学門径書』を、同年五月には太田正弘・加藤政雄・石井謹吾共著『国際私法』を翻訳した。⁽²⁴⁾

李叔同は一九〇三年にはまた、聖約翰大学 (St. John's College) の国文教授の職にも就いている。同校は、一八七九年に当時のアメリカ聖公会上海司教のシエルシェウスキー (Samuel Isaac Joseph Scherschewsky、施約瑟、一八三一—一九〇六) が、同会中国伝道教区初代主教のブーン (William Jones Boone、文惠廉) の設立した培雅書院 (一八六五) と度恩書院 (一八六六) を合併して、上海西郊の梵王渡に設立した学校で、戦前に中国で設立されたキリスト教系大学の中では最も歴史があり、卒業生からは著名人を輩出した。もともと李叔同の在職期間は長くはなかった。退職の理由は、同僚の尤惜陰 (後に出家して演本法師) が杭州虎跑寺で仏教婦依式を受けたことが校長の知る所となり、宗教の相違を怪しまれ、それに不快を覚えた李叔同は尤とともに自発的に退職した。⁽²⁵⁾ また同校では待遇の面で、外国人教師と中国人教師の間に著しい格差があったとも言われており、⁽²⁶⁾ それも辞職の一因かもしれない。聖約翰大学における李叔同については、これまでほとんど論じられていない。同校での経験は李叔同にとって、言わば初めての直接的な外国経験であり、また在職期間の短さにも関わらず同僚の尤惜陰や楊白民らとは出家後も交際を続けていた。⁽²⁷⁾ この時期の李叔同が何を考え、またそれがその後の李叔同にどのような影響を及ぼしたのかを知る上でも、聖約

翰大学時代については、今後更なる調査研究が必要であろう。

一九〇五年二月、上海で母が亡くなると、李叔同は母の棺とともに天津に戻り、葬儀を執り行った。それは旧来の方式とは異なり、李叔同自らがピアノを弾いて哀悼の歌を歌い、家族全員が通常の白の喪服ではなく黒い服を身に着け、弔問客には洋食と中華料理をふるまうというもので、天津の『大公報』はじめ新聞各紙で報道された。この新式の葬儀は「李家の三番目のお坊ちゃま」による「奇事」として、親戚や友人の間で物議をかもした。⁽²⁸⁾

同年六月二十九日、李叔同は天津にて母の追悼会を開催した。同会には天津のオーストリア・ハンガリー帝国租界の工部局官吏、直隸高等工業学堂（天津工芸学堂）⁽²⁹⁾の日本人教習、同校監督の趙元礼、直隸省学務処総辦の嚴修、その他にも各学堂の校長や教員らが参列し、総数は四百名余りと、当時の新聞に記されている。⁽³⁰⁾直隸高等工業学堂の日本人教習の一人に「松長君」という名前が見られるが、これは松長長三郎のことであろう。松永は一九〇三（明治三六）年に東京美術学校図案科を卒業すると、同年一月に天津市官立商品陳列所工芸部員として中国へ赴任し、一九〇五年以降は清国直隸高等工芸学堂に勤務していた。⁽³²⁾松長は東京美術学校が一八九九年に開催した生徒成績品展覧会で図案科第二教室・三等賞を受賞し、また翌年には卒業制作が東京美術学校図案科を代表して関西教育大会に出品されるなど、優秀な学生だったようである。⁽³³⁾

また直隸高等工業学堂監督の趙元礼とは、李叔同が一〇代の頃から師としてきた趙元礼である。詩を介しての二人の交流は、李叔同が上海へ転居した後も続いていた。趙元礼は一九〇二年より直隸高等工業学堂の庶務長を務め、日本にも教育事業の視察に訪れている。また、直隸省学務処総辦の嚴修とは、前述の経済特科の開設を奏請した嚴修である。嚴修は当時、その革新性の故に保守派官僚に疎んじられたため、貴州での任期が満ちて北京に戻ってからは請

暇して故郷天津に戻った。⁽³⁴⁾趙元礼と嚴修は天津の近代詩壇の代表的存在であり、ともに能書家としても著名であった。嚴修は李叔同の篆刻の師である唐敬嚴の友人でもある。李叔同は詩や書画、篆刻などを通じて、彼ら天津の名士や才子らと親しく交際していたが、その文人ネットワークは天津を離れた後も李叔同に様々な便宜を図ることとなった。

二、日本での活動（一九〇五—一九一一）

母の葬儀が終わると、李叔同は妻子を天津の実家に残し、一九〇五年八月に単身で日本に私費留学した。欧米への官費留學生の派遣は一八七〇年代から始められていたが、日本に最初の官費留學生が送られたのは一八九六年のことである。一九〇一年五月に湖広總督の張之洞と兩江總督の劉坤一が連名で上呈した『籌議變通政治人材為先摺』において、各省による留學生の派遣が奨励された。また一九〇三年に張之洞の制定した『鼓勵遊學卒業生章程』によって、日本留學生は卒業学校の種類に応じて、挙人或進士などの地位と官職を授けられると規定されると、日本への留學生は急増した。⁽³⁵⁾一九〇五年に科擧制度が全面的に廃止されると、留學生は劇的に増加し、一九〇五、六年当時、日本への留學生数は最高潮に達した。清朝政府はまた留學生の更なる増加と經濟的負担の軽減を意図して、私費留學を奨励し、手続きを簡略化する一方、私費留學生に対しては學業に応じて官費留學生と同様に官位を与えることを規定した。このような時代背景の下、李叔同もまた日本へ私費で留學をした。その選択に関して、嚴修との交際は考慮に値する。前述の通り、嚴修は貴州の學政を退いた後は天津に戻り、教育による救國を模索していた。一九〇二年には自費で日本に赴き、幼稚園から大學まで、様々な教育機関で教育の現状を視察した。嚴修は天津にも日本にも日本人の友

人知人が多く、一九〇一年には短期ではあるが息子二人を日本に行かせ、一九〇二年の日本視察の際には彼らを同行し、留学させている。⁽³⁶⁾ 帰国後は直隸高等工業学堂など新式学校の設立に参与し、直隸省における普通教育の発展に大いに貢献した。直隸総督の袁世凱はその才能と業績を高く評価し、重用した。袁世凱の懇請により、嚴修は一九〇四年五月には直隸学校司（後に学務処と改称）総辦に就任し、その直後に日本で二回目の教育視察を行った。また李叔同の「天涯五友」の一人、袁希濂が一九〇四年に日本の法政大学に留学したことも、日本留学を決意した一因かもしれない。⁽³⁷⁾

一九〇六年九月、李叔同は東京美術学校（現東京芸術大学）西洋画科撰科に入学した。李叔同が西洋美術を専攻するに至った理由は、管見では未詳である。ただ、前述の松長三郎が東京美術学校の卒業生であったこと、また嚴修が一九〇二年の日本視察の際に東京美術学校を訪問し、校長の正木直彦（一八六二—一九四〇・一九〇一—一九二二東京美術学校第五代校長）に絵画、彫刻、漆工教室を案内してもらったことが、李叔同の選択に何らかの影響を及ぼしたとも考えられる。⁽³⁸⁾

李叔同の入学した当時、西洋美術を専攻する中国人留学生はまだ少なく、李叔同は第二期留学生である。第一期中国人留学生は一九〇五年に入学した黄輔周（西洋画科撰科、一九〇八年除籍）一名のみで、李叔同の同期には曾孝谷（延年、一八七三—一九三七・西洋画科撰科、一九一一年卒業、談誼孫（彫刻科撰科、一九〇八年除籍）の二名がいた。⁽³⁹⁾ 日本で西洋美術を学ぶ中国人がまだ珍しかったからか、徳富蘇峰創刊の『國民新聞』が李叔同取材している。この中で、李叔同は「日本語の講義解りますか」との記者の問いに「解りません、午後の講義聴きません、英語の講義聴いて居ります。英語余程遣ります」と答えている。⁽⁴⁰⁾ 当時、李叔同は法学書を翻訳するだけの読解力を有しながら、

日本語を話したり、聞いたたりするのは余り得意ではなかったようである。

李叔同が母の葬儀でオルガンを演奏したことは前述の通りであるが、『國民新聞』にも「ヴァイオリン弾きます、他大抵弾ります」と答えるなど、音楽にも関心が高く、一九〇六年一月には中国で最初の音楽専門誌として知られる『音楽小雜誌』を刊行している。当初、李叔同は留学生仲間と美術専門誌の刊行を構想していたが、一九〇五年一月に「清国留学生取締規則」が出ると、これに対する抗議行動として留学生の一斉帰国や自殺が起こり、李叔同らの計画も頓挫したため、李は一人で『音楽小雜誌』を発行した。⁽⁴¹⁾ 李叔同はまた、森槐南や大久保達らの漢詩結社、随鷗吟社にも参加し、同人らと親しく交際していた。

一九〇六年には、同窓の曾孝谷とともに中国新劇の魁とも言うべき春柳社を立ち上げ、翌年には東京で「椿姫」、⁽⁴²⁾「アンクル・トムの小屋」を上演して好評を博した。特に「椿姫」で李叔同の演じたマルグリットは評判が高く、次いで春柳社が「アンクル・トムの小屋」を上演した際には、李叔同を目当てに劇場へ向かった観客も少なくなかったようである。これについて、周作人は「たしか、李息霜（李叔同・大野注）に敬服したためだったか、魯迅たち数名も見に行ったことがある」と記している。⁽⁴³⁾ 一九〇七年に春柳社に参加した劇作家の欧陽予倩によると、当時の春柳社では李叔同だけが芸術に見識があり、李叔同は舞台のために自費で高価な衣装をあつらえる程の熱の入れようだったという。⁽⁴⁴⁾ 一〇代の頃から京劇を好み、上海では京劇の舞台に出演したこともあるだけに、李叔同は演技や演出に独特のこだわりを見せ、それが舞台全体の水準を高いものとしたのであろう。⁽⁴⁵⁾

三、帰国から出家まで（一九一一—一九一八）

一九一一年、李叔同は東京美術学校西洋画科撰科を卒業し、帰国の途についた。留学中は演劇や音楽など、様々な芸術活動を行っていたが、決して学業を疎かにしていた訳ではなく、一九一〇年には前年度の学業に対する精勤賞を受賞している。全学生のうち、同賞を受賞したのはわずか二名であったが、中でも外国人は李叔同ただ一人である。⁽⁴⁶⁾ また東京芸術大学に残された卒業制作の自画像からは、李叔同の芸術家としての優れた才能がうかがわれる。それは、李叔同が早くも、東京美術学校に入学してわずか二年半後の一九〇九年と翌年に、黒田清輝と久米桂一郎が明治美術会を脱会して設立した白馬会作品展に四点ものの油絵を出品していることから明らかである。⁽⁴⁷⁾ 当時、李叔同はまさに「西洋の表現法を完璧に習得した数少ない中国人芸術家の一人」であった。⁽⁴⁸⁾ 祖国へと向かう李叔同の胸中には、ハルプスマイヤーの指摘するように「中国に、激しいばかりに現代的で、また本質的には中国的な文化を創出せんとする決意」と希望が、渦巻いていたことであろう。⁽⁴⁹⁾ しかし、当時の中国社会はまだ、李叔同がその志を果たしうる程には成熟していなかった。

李叔同が帰国した当時の中国の美術界あるいは美術教育はどのような状況にあったのだろうか。中国で最初の私立美術学校である中西美術学校（後に中華美術学校と改称）が上海に設立されたのは一九一一年のことである。創設者の周湘（一八七一—一九三四）は後述の経亨頤や李叔同らと同じく、戊戌の政変に関与した廉で日本やヨーロッパに逃れ、同地で西洋美術を学んだ。同校を皮切りに、劉海粟（一八九六—一九九四）による上海图画美術院（一九一二）、

国立北平美術専門学校（一九一八）、南京美術専門学校（一九一九—一九二〇）などが創設された。その後、武昌芸術専科学校（一九二二）、蘇州美術専科学校（一九二二）、浙江美術専門学校（一九二三）、上海芸術大学（一九二五）⁽⁵⁰⁾、中華芸術大学（一九二五）⁽⁵¹⁾、西南芸術専科学校（一九二五）、新華芸術専科学校（一九二六）など、中国各地に美術学校が設立されるのは一九二〇年代以降のことであった。⁽⁵²⁾

当時、中国で西洋美術の教育が盛んになった要因として、陳野は新文化運動の影響と「『実業の振興』という社会的需要」を指摘している。⁽⁵³⁾ 新文化運動の影響とは、主として蔡元培の美育思想に由来する。蔡元培は「純粹なる美育が我々の感情を陶冶し養成するのは、それによって高尚で純潔な習慣が身に付き、他人と自分を区別する考えや、自分の利益のために他人を利用するような思いが次第に消えていくからである」として、「美育を以て宗教に代える」ことを主張した。⁽⁵⁴⁾ 当時、中国の知識人の間では、美学を社会形成の手段として実証哲学主義的に利用するという芸術立国論が流行していたが、芸術を通じて国民の精神を改造し、近代国家に相応しい人格を形成するという蔡元培の美育思想はまさにその流れを汲むものであった。⁽⁵⁵⁾

次に「『実業の振興』という社会的需要」であるが、これは明治期の日本で芸術、特に西洋美術が殖産興業政策の下、図案の改良など主として実業新興の手段と認識されていたのと同様である。教育の現代化を意図して、清朝政府が一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて留学生の派遣を奨励したのは前述の通りであるが、それと平行して外国人（主として日本人）教員の招聘を開始した。それは清朝にとって経済的負担の軽減、新知識を受け取ることの出来る人数の増加、そして何よりも「青年たちに新知識を学ばせながらも、支配階級の統制下」に置くことが出来るという点で、留学生派遣よりも魅力的な方策であった。新しい教育制度の下で、政府が育成を意図した新知識人とは「旧教育制度

と同様、支配階級が要求する『忠君、尊孔、尚公、尚武、尚美』に適應できる人材である。留学の奨励から外国任教員の招聘という政策転換は、言わばそのための「必然的」な変化で、その舞台となったのが新式学堂である。⁽⁵⁶⁾このような新政策の下、東京美術学校の卒業生も教習として中国各地へ赴いた。赴任先は、一九一〇年代は師範学校や工業・工芸学校が中心で、それが美術学校へと変わるの是一九二〇年代になってからのことである。⁽⁵⁷⁾

さて、前述の欧陽予倩は、李叔同は資産家の出身で、他の留学生に比べて経済的にかなり恵まれていたと記しているが、父の死後は時代の変化とともに没落が進み、李叔同が帰国した頃にはほぼ破産状態にあった。そのため李叔同は就職を余儀なくされ、帰国後は故郷天津の直隸模範工業学堂の図画教員となった。李叔同は如何なる気持ちで、この仕事に就いたのだろうか。帰国以前に友人に宛てた手紙から、李叔同が当時、天津の教育状況にかなり期待していたであろうことが想像できる。李叔同は一九〇五年一月一七日、聖約翰大学に勤めていた頃の同僚で上海在住の友人楊白民（一八七四—一九二四）に手紙を出し、次のように述べている。

もしも貴殿が天津に学務調査に行くのを望みならば、私をご紹介いたしましょう。当地の学術界のレベルは實際のところ、上海よりも上です。昨年には専門の音楽研究所が設立され、生徒は既に二百名を越えています。⁽⁵⁸⁾

当時、直隸省総督を務めていた袁世凱は行政機関「学校司」を設立するなど、新式教育の振興を提唱、推進しており、上記の音楽研究所も同様な意図から設立されたものであろう。李叔同はこのような新しい環境で、日本で学んだ西洋美術の力を存分に發揮してみたいと考えたのかもしれない。芸術教育の振興への情熱が、李叔同にこの仕事を選ばせたとも考えられようか。

李叔同に直隸模範工業学堂の仕事を紹介した人物について、現段階では未詳であるが、李叔同の古くからの友人で、

当時は同校の校長をしていた周嘯麟の可能性が高い。李叔同と周嘯麟が親しい友人であったことは、残された手紙（一九〇六年一二月五日）からも明らかである。李叔同は楊白民に周嘯麟への紹介状を送り、周嘯麟とは「金石の交わり」なので、楊白民のために必ず一生懸命尽くしてくれるだろうと記している。⁽⁶⁰⁾ また周嘯麟には、上海人の楊白民は天津に不慣れで、言葉も違っていて通じないので、学堂や工場、陳列所など教育に関係のある場所に案内して、よく面倒を見てあげてくれるよう依頼している。⁽⁶¹⁾ 周嘯麟の他に、李叔同に直隸模範工業学堂の仕事を紹介あるいは推薦した人物としては、同校日本人教習の松長長三郎や同校監督の趙元礼、直隸省学務処総辦の嚴修などが考えられる。

尚、上述の陳列所とは、主として直隸省の工芸その他の物産を陳列し、また参考品として日本や欧米各国の物品も陳列した天津考工廠である。その管理人は中国人学生で、昼間は陳列の管理について学び、閉館後はそこで日本語や数学など、ほかの学問を学ぶことになっており、学校のような機能も持っていたようである。技師長として陳列方法などについて指導し、一九〇四年の開館の労を取ったのは、日本人の塩田真である。塩田は一九〇三年から一九〇五年まで中国に滞在したが、それ以前の一八九七年から一八九九年まで東京美術学校で嘱託教師を務めており、図案改良家として著名であった。趙元礼は直隸模範工業学堂監督として東京美術学校を見学しているが、その仲介をしたのは塩田である。⁽⁶²⁾ また前述のように、松長長三郎は東京美術学校を卒業した一九〇三年に天津市官立商品陳列所工芸部員として中国に赴任しているが、この商品陳列所とはおそらく天津考工廠であり、そこへ松長を招聘したのも塩田であらう。

李叔同は直隸模範工業学堂での仕事をわずか一年で辞職し、一九一二年には上海へと赴いた。上海では、楊白民が新時代の女子教育のために自宅を開放して設立した城東女学校の国文教師を務めた。前述の手紙のように、楊白民と

の交際は李叔同の留学後も続き、李叔同は楊白民の要請に応じて、楊白民が一九一〇年から発行していた学報『女学生』に日本から連続して寄稿している。⁽⁶³⁾

上海では城東女学校での教務の他に、南社社友として活躍し、また『太平洋報』や同画報副刊の編集に従事するなど、李叔同は同盟会系の活動に積極的に参加した。⁽⁶⁴⁾ 南社とは、同盟会会員の柳亜子（一八八七—一九五八）や高旭（一八七七—一九二五）、陳去病（一八七四—一九三三）らが一九〇九年一月に蘇州で結成した文学社团である。中国近代文学史上、最長の歴史と最大の規模を誇り、各地に支社組織や社友を有し、全盛期には千人以上の社友がいた。しかし、一九一二年当時はまだ小規模で、社友総数は二百人余り、大部分が上海在住者であった。同年三月一日に民国になって最初の集会（第六次雅集）が開かれると、上海の社友のほとんどが参加した。李叔同は一九一二年二月に朱葆康（字少屏、一八八二—一九四二）の紹介で社友となっており、第六次雅集には春柳社同人の曾孝谷を誘って出席している。⁽⁶⁵⁾

また『太平洋報』は一九一二年に葉楚傖（字卓書、一八八七—一九四六）が創刊した日刊紙で、資金は中国同盟会中部総会の庶務部長の陳英士（其美、一八七八—一九一六）が調達した。柳亜子によると、姚雨平（一八八二—一九七四）が社長を務め、編集長の葉楚傖はじめ、李叔同や柳亜子、蘇曼殊（一八八四—一九一八）ら編集者のほとんど全員が南社社友で、お互いに親しい関係にあったという。李叔同はまた一九一二年五月の『南社通訊録』の表紙デザインや題字も担当している。⁽⁶⁷⁾ 同紙には不定期刊行の画報副刊があったが、李叔同はその編集責任者でもあった。⁽⁶⁸⁾

一九一二年の秋に『太平洋報』が停刊となると、李叔同は浙江官立両級師範学堂（一九一三年に浙江省立第一師範学校と改称）の経亨頤校長（字子淵、一八七七—一九三八）の要請に応じて、同校の美術と音楽の教師に就任した。

經亨頤は戊戌政変でマカオに亡命し、その後一九〇三年に日本に留学し、東京高等師範学校で数学・物理を専攻した著名な教育者で、一九一二年から浙江官立兩級師範学堂校長と浙江省教育会長を兼任していた。同盟会会員でもあり、一九一七年には李叔同の紹介で南社に加入している。

浙江官立兩級師範学堂は小学校教員の養成学校として、一九〇八年に設立された。ジェレミー・バーメーは、梁啓超の賛同者である經亨頤の真意は、これらの教員が梁啓超のいう所の「新民」となり、「社会変革者の先兵」として、地域に「新たな市民意識」を普及させ、地域社会を指導することにあつたと指摘する。同校では道德教育と芸術教育が重視されていたが、その目的は学生に市民権の価値や市民としての責任、共和制国民国家に対する義務意識を植え付けることであつたといふ。⁽⁶⁹⁾

李叔同は浙江省立第一師範学校での授業に、日本で学んだ最新かつ正規の習得方法を取り入れた。その一例が一九一四年に行われた男子裸体モデルの写生である。李叔同は日本に留学した直後から西洋美術の習得方法として写生の重要性を提唱していたが、臨模が主流であつた当時において、李叔同の主張と実践は斬新かつ画期的な試みであつた。李叔同による、この中国で最初の試みは、言わば「中国で西洋美術受容がようやく始められたというメルクマール」であつた。尚、近代中国の代表的な西洋画家、劉海粟（一八八六—一九九四）が男子裸体モデルを用いた授業を行つたのは一九一七年のことで、李叔同に三年遅れる。⁽⁷⁰⁾

浙江省立第一師範学校の学生らは李叔同の才能に加えて、その「真面目で嚴肅、献身的」な教育精神や人格に魅了された。当時、美術や音楽は非実用的な学問として一般に軽視されていたが、同校では課外芸術活動が活発で、その様子はまるで芸術専門学校のようなつたと、卒業生で弟子の豊子愷（一八九八—一九七五）は記している。⁽⁷¹⁾ この課外

活動について、豊子愷と同時期に在籍していた画家の沈本千（一九〇三―一九九一）も、同校では学生が自由に課外研究グループを作ることができたと述べている。これは当時にしては珍しいことで、同校は「学生の個性の発展と育成を重視していた」と沈本千は記している。⁽⁷²⁾こうした環境下、李叔同も楽石社を組織し、学生らと金石研究を楽しんだ。

浙江省立第一師範時代、李叔同が最も親しく交際したのは夏丐尊（一八八六―一九四六）である。夏丐尊は父の勧めに従い、一九〇二年からキリスト教会系の上海中西書院（Anglo-Chinese College、東呉大学の前身）に学ぶが、経済的理由で翌年には退学し、学費免除の紹興府学堂へ転学した。一九〇五年に日本に留学し、弘文学院で学んだ後、東京高等工業学校に入学した。前述のように、清朝政府の規定では当時、日本の公立学校入学者は出身地の官費奨学金を受けられることとなっていたが、浙江省では高等工業学校への進学者が多かったため、夏丐尊は奨学金を受けられず、一九〇七年に学業半ばで帰国した。翌年、日本人教員の中桐確太郎の通訳・翻訳担当者として、浙江官立両級師範学堂に就職した。当時、周樹人（魯迅）も同じく日本人教員、鈴木亀寿の通訳・翻訳担当および理科（生理学・科学）教員として同校に勤めていた。⁽⁷³⁾

李叔同が浙江省立第一師範学校に奉職した期間は一九一二年から一九一七年と短い。しかし、その成果は決して少なくなかった。李叔同の直接の教え子である豊子愷や呉夢非（一八九三―一九七九）、劉質平（一八九六―一九七八）らは同校を卒業すると、一九一九年に上海師範専科学校（男女共学・二年制）を設立した。⁽⁷⁴⁾彼らの教え子には、魯迅ら著名作家の著作の表紙装丁で知られる陶元慶（一八九三―一九二九）や錢君匋（一九〇六―一九九八）らがいる。豊子愷らは上海師範専科学校で学生を指導する一方、中国で最初的美育学術団体である中華美育会を設立した。同会

の目的は、全国の芸術関係者や大中小学校の教員が共同で芸術教育を推進することであり、浙江省立第一師範時代の恩師で、当時は上海で美術教育に携わっていた姜丹書（一八八五—一九六二）、前述の周湘や劉海粟、歐陽予倩ら、そして上海や北京、南京、山東など全国各地の教職員が参加した。彼らはまた一九二〇年四月に中国で最初的美育学術雑誌『美育』を創刊し、夏には図画や音楽の講習会を開催した。⁽¹⁵⁾『美育』の総編集は上海專科師範学校長の呉夢非が、題字は弘一法師が担当した。同誌は一九二二年に第七期を以て停刊となるが、創刊当時は上海図画美術専門学校の『美術』、北京大学画法研究会の『絵学雑誌』と並んで、芸術教育に関する有力雑誌であった。

以上、近代中国の西洋芸術・文化の受容史における李叔同の足跡を簡単に見てきた。李叔同は言わば、西洋芸術・文化を受容した第一世代である。李叔同が日本で入手し、中国にもたらした「西洋芸術・文化の種」は李叔同の時代には直接、実を結ぶことはなかった。しかし、その種は教え子の豐子愷や呉夢非、劉質平ら第二世代に手渡され、さらにその弟子の陶元慶や錢君匋ら第三世代へと受け継がれていったのである。李叔同が日本で受容した西洋音楽や新劇も、西洋美術と同様に第二世代、第三世代へと受け継がれていった。

四．出家（一九一八）

李叔同の出家の理由については、当時の中国の政治的、社会的状況や生家の没落、持病の神経衰弱、体調不良など様々に取りざたされている。弘一法師自身は出家の遠因と近因をそれぞれ次のように挙げている。まず遠因であるが、浙江省立第一師範で有名人の講演があった折、夏丐尊と二人で抜け出して西湖でお茶を飲んでいた所、夏丐尊が「我々

のような人間はむしろ出家して和尚になった方がいいのだ」と言い、李叔同はそれを面白いと感じたのだという。一方、近因は一九一六年の夏に神経衰弱の治療を目的に、杭州の虎跑寺で経験した断食にあるという。⁽⁷⁷⁾虎跑寺で約二〇日間を過ごした李叔同は僧侶の生活に憧れ、翌年からは菜食生活を始め、また『楞嚴經』『大乘起信論』などの仏典を大量に購入した。

李叔同が仏教について最初に教えたのは馬一浮（号湛翁、一八八三—一九六七）である。馬一浮は由緒ある讀書人家庭の出身で、父は四川仁寿県の県令を務めた。一八九八年に紹興で、魯迅や周作人らとともに科挙の県試を受け、首席となっている。翌年、上海に出て英語やフランス語、ドイツ語、日本語などを学び、一九〇〇年には馬君武・謝無量らと上海で雑誌『翻譯世界』を創刊し、欧米の学説などを紹介した。一九〇三年に米国に留学し、途中ドイツのベルリンに遊んだ折にマルクスの『資本論』を入手した。これが中国に持ち込まれたマルクスの最初の著作とされている。一九〇四年から一九〇五年にかけて日本に留学し、西洋哲学を研究した。一九一八年には蔡元培の依頼により北京大学文科学長となるが、儒学に対する学校側との姿勢の相異から辞職した。⁽⁷⁸⁾

馬一浮は国学大師と称された儒学者であるが、仏教にも造詣が深かった。一九一八年一月、馬一浮は友人の彭遜之に静寂な場所を尋ねられ、以前に李叔同から聞き及んでいた虎跑寺を紹介した。彭遜之は元々仏教に関心があった訳ではなく、あくまでも静寂を求めて虎跑寺を訪れたのであったが、雰囲気感化されたのか、数日後に出家する。この時期に李叔同も同じく虎跑寺を訪れ、彭遜之の出家に感動して自らも出家を決意し、一九一八年七月一三日に得度し、釈演音（号弘一）となったのである。

五・仏典の日本への寄贈

前述のように、弘一法師は南山律宗中興の第十一代祖師として、現在も中国内外の信者の崇敬を集めている。南山律宗は道宣（五九六―六六七）⁽⁷⁹⁾を開祖とし、五世紀初めに中国で訳出された『四分律』を重視する。律の原義は「除去」で、釈尊の在世当時より教団の弟子のなかで非行があった場合に、その弟子を「除去」するために規定された禁止や罰則の法をいう。律は経や論とならんで、仏教經典の三蔵の一つとして重視されるが、律典に基づいて宗派を形成したのは律宗のみである。律宗では律典の研究や講義に加えて、戒や典籍も伝承されていなかった。弘一法師は南山律宗中興の師と称されるが、それは一つには各地の寺院や仏教学院で僧侶や信者を対象に講義し、律宗の教義を広めたことによる。また一つには、各地の寺院に放置されたままであった戒律や典籍を整理し、校勘、校訂の後に出版し、その普及に貢献したことによる。⁽⁸⁰⁾そうした活動の一環として、弘一法師は中国で新たに発見、整理した仏典を日本の寺院や大学図書館に寄贈し、また中国では既に失われた仏典を日本から購入した。

まず中国で新たに発見、整理した仏典の日本への寄贈について述べたい。一つは弘一法師の手書による『四分律比丘戒相表記』である。弘一法師は一九二一年に杭州にて『四分律』を入手したが、その戒相が煩雑で、暗誦が困難なことから、初学者にも便利なように要点をまとめて、表にすることを決意した。数年の歳月をかけて完成した『四分律比丘戒相表記』は、弘一法師にとって「出家以降の最大の著作」であった。⁽⁸¹⁾弘一法師は中華所局に委託して影印本を千部印刷し、中国各地の寺院に寄贈した。同書は上海の内山書店を通じて、東京帝国大学、京都帝国大学、大谷大

学、龍谷大学、大正大学、東洋大学、高野山大学など、日本各地の大学や図書館にも寄贈された。⁽⁸²⁾ 印刷経費七百元は上海在住の豪商で、弘一法師の熱心な信者の穆湘玥（字藕初一八七六一一九四三）⁽⁸³⁾ が負担した。穆湘玥は李叔同の南洋公学時代の同級生、穆湘瑤の弟で、弘一法師とは当時からの知り合いである。穆湘玥は一三歳で綿花商の徒弟となり、苦学の末にアメリカで農学修士を取得し、帰国後は上海を中心に綿紡績の工場や会社を興した。一九二〇年代には南京国民政府の工商部常務次長を務めるなど、当時の中国経済界の代表的人物の一人である。⁽⁸⁴⁾

内山書店の店主、内山完造（一八八五—一九五九）に弘一法師を紹介し、『四分律比丘戒相表記』の日本への寄贈を依頼したのは、同書店の常連客であり、内山完造と弘一法師の双方と親しい関係にあった夏丐尊である。⁽⁸⁵⁾ 内山書店は大学目録の海外出張員として中国に赴任していた内山完造が一九一七年に上海で開いた書店である。内山完造と魯迅の交際はよく知られているが、他にも田漢や欧陽予倩、鄭伯奇、郭沫若、郁達夫ら、著名な作家や文人が頻繁に入りしていた。日本から初めて上海を訪れる作家や文化人が内山完造に出迎えや案内を依頼することも多く、一九二〇年代半ば頃には内山書店は上海在住の日中文化人の一種のサロンとなった。また、長谷川如是閑や金子光晴、室伏高信、鈴木大拙、横光利一、林芙美子、武者小路実篤、岩波茂雄など、内山の紹介で魯迅の面識を得た日本人は極めて多い。

さて、日本への寄贈は当初、三十部という予定であったが、夏丐尊から三十五部が届き、それを上記の大学などに送付した所、話を聞きつけた日本の大学や寺院から希望者が続出したため、内山書店は結局百七十部余りを送付した⁽⁸⁶⁾ という。

前述のように、夏丐尊と李叔同の交際は浙江省立第一師範時代に始まるが、二人の関係は李叔同の出家後も変わら

ず、弘一法師にとって夏丐尊は最も親しい友人の一人であった。一九三〇年、弘一法師は修行に専心するために閉門蟄居と世間との絶交を宣言したが、夏丐尊と弟子の豐子愷、劉質平の三名だけは例外であった。また夏丐尊も前述の穆湘玥や豐子愷、劉質平らと「晚晴山房護法会」を結成し、弘一法師のための薬品や文房四宝、地方行脚の費用を負担するなど、生涯にわたり弘一法師を支援した。

『四分律比丘戒相表記』について、弘一法師は劉質平に宛てた「遺書」で、次のように述べている。

私の死後、およそ追悼会や建塔、そのほか記念になるようなことは、一切してはならない。このようなことは私にとって無益であり、むしろ幸福を逸することになるからである。もし何か行事を行って、私の記念としたいと願うならば『四分律比丘戒相表記』を二千部印刷していただきたい。

弘一法師は続けて、この二千部のうち千部は仏学書局で流通させ、その売り上げは同書局に寄付すること、五百部は内山書店で保管し、内山から日本に適宜寄贈してもらうこと、残りの五百部は同人で分けること、また印刷費用は劉質平が寄付を募ることなど、細かく指示を与えている。⁽⁸⁷⁾

弘一法師が『四分律比丘戒相表記』に次いで、内山完造に日本への寄贈を依頼したのは、同じく大著『華嚴經疏論纂要』である。同書は一九二九年に弘一法師が廈門の南普陀寺から泉州經由で温州に戻る途上、福州の鼓山湧泉寺で発見したものである。鼓山湧泉寺の歴史は唐の建中四年（七八三）に遡り、明の嘉靖年間に一度焼失した後、天啓七年（一六二七）に再建された。清の崇徳元年（一六三六）に建てられた藏經閣には、現在も康熙帝や乾隆帝の御賜佛像や二万冊あまりの仏典が保管されている。日本の仏教学者、常盤大定（一八七〇—一九四五）は一九二九年一月に湧泉寺を調査し、同寺について次のような賞賛の言葉を残している。⁽⁸⁸⁾

・鼓山に三大蔵あり、加之、多数の仏典を蔵するは、近世学徳の住せる跡を語り、四百余州中に誇るに足るものあり。

・湧泉寺の現状は、支那随一の隆昌を極むといふべきものにして、堂閣の具備する点に於て匹俦稀なり。

・鼓山の正法蔵殿に、明の二蔵、清の一蔵の三蔵を貯へ、而も幾多の櫛に納められ、秩序整然として、一絲紊れざるは、他に比類なき所にして、之と比肩し得べきは、僅に福州西禪寺のみ。著者の知る限りに於ては、他に絶えて之を見ざるなり。

弘一法師は湧泉寺に所蔵された大量の經典から、同寺第六十五代住職で名僧として知られる道霈禪師（一六一五一七〇二）が撰述した『大方広仏華嚴經疏論纂要』（全一二〇卷、分装四八冊、版本二四二五片）⁽⁸⁹⁾を発見した。その喜びは格段であつたようで、弘一法師は後に夏丐尊に宛てた手紙で次のように述べている。

案ずるに、わが国の江蘇浙江の古い經典版本はすべて、太平天国の乱で灰燼に帰した。最も古いものとしては、北京の龍蔵版があるのみである。これは恐らく雍正帝の頃のものであらう。この度の『華嚴經疏論纂要』は康熙帝の頃の版本である。あるいは、わが国に現存する最も古い經典版本かもしれないが、今はまだわからない。⁽⁹⁰⁾

夏丐尊宛てのこの手紙には、弘一法師が湧泉寺に同行した蘇慧純居士に、同纂要を二十五部印刷し、そのうちの十部を内山書店經由で日本へ寄贈するように勧めたことが記されている。また豊子愷に宛てた手紙では、二十五部のうち十二部を内山書店經由で日本の各宗教学大学や図書館に寄贈し、さらに二部を上海功德林仏經流通所に寄贈するよう指示を与えている。⁽⁹²⁾

日本での寄贈先について、弘一法師から一任された内山完造は、友人の高岩勘次郎（一八七七—一九三五）⁽⁹³⁾とともに

に来店した画家、武井猗蘭子の紹介で、武井の下宿していた上野寛永寺管長と古書肆文求堂の店主、田中慶太郎（一八八〇—一九五二）⁽⁹⁴⁾に相談の上、寄贈先を決定した。当初の十二部を日本へ送った後、内山完造に個人的に寄贈を依頼する者なども現れ、最終的に以下の十五ヶ所に送られた。東京帝国大学、京都帝国大学、大正大学、東洋大学、山谷大学、龍谷大学、高野山大学、京都東福寺、黄檗山萬福寺、比叡山延暦寺、奈良法隆寺、上野寛永寺、京都妙心寺、他二ヶ所（内山、忘失）。日本への寄贈部数が当初の予定よりも増えたことから、弘一法師は『華嚴經疏論纂要』を早くから送付していた南京支那内学院に対して、同書を内山書店に渡してくれるよう依頼している⁽⁹⁵⁾。また弘一法師が詳細に閲読し、自ら圈点を付けた版も日本に寄贈された⁽⁹⁶⁾。

『華嚴經疏論纂要』は全一二〇巻、分装四八冊という大著で、これを計一五部、上海から日本の各地へ送るのは、内山完造にとってもかなりの費用と労力を要したことであろう。この件についての弘一法師の礼状が、この度、日本で保管されていた内山完造の遺品から見つかった⁽⁹⁷⁾。手紙の日付にはただ二月一六日とのみ記されているが、内容から見て一九三〇年のものと思われる。温州からの投函である。

この手紙で弘一法師は、内山完造が『華嚴經疏論纂要』を日本へ郵送し、また各種書籍を弘一法師に送ってくれたことへの感謝を述べ、また、内山の尽力と好意に対する謝意として書を二十枚送るので、希望者に差し上げて欲しいと記している。弘一法師は能書家としても知られた高僧であり、その書を所望する人は当時から極めて多かった。内山完造は人々の望むままに与えたため、内山完造の遺品のうち、弘一法師から送られた手紙は現在見つかった限りでは、ただこの一通のみである。

弘一法師は『四分律比丘戒相表記』や『華嚴經疏論纂要』の他にも、内山書店を通じて数回、日本に仏典を寄贈し

ている。弘一法師はなぜ日本に仏典を寄贈しつづけたのだろうか。その理由として弘一法師自身は、中国では戦禍により焼失する恐れが高いので、日本に送った方が安全であると説明している⁽⁹⁸⁾。しかしそれに加えて、当時の日本の中国進出も考慮すべき要因であろう。弘一法師は一九二〇年代後半から三〇年代前半にかけて、仏典を日本に寄贈するかたわら、豐子愷とともに仏教の絵解き画集『護生画集』を作成した。同書は当初、中国国内でのみ流通させる予定であったが、熱心な信者の李圓淨（一九〇〇—一九五〇）が日本への寄贈を提案したことで、枚数も内容も当初の予定を大幅に上回るものとなった⁽⁹⁹⁾。李圓淨は、弘一法師が宗派を超えて深く崇敬していた浄土宗の高僧、印光法師（一八六一—一九四〇）の在家の弟子で、弘一法師の信奉者の一人である。豐子愷は弘一法師の死後も『護生画集』の作成を続け、一九七五年に全六集、計四百五十幅の大作として完成させた。テーマは集ごとにそれぞれ異なるが、一九二九年刊行の第一集では殺生戒がテーマとなっており、動物愛護を描いた作品が中心である。しかし、その提唱するものが単なる動物愛護ではなく、人間をも含んだ、生き物すべてに対する殺生の戒め、すなわち日本や欧米列強の中国侵略に対する批判、抵抗であることは言うまでもない。弘一法師はまた『護生画集』の作成にあたり、「まだ仏教を信奉していない、近代的な学問を学んだ人々」を読者として想定し、「優美で柔和な情緒によって読者に物寂しさや哀しみ、哀れみを感じさせ」、深い感動を与えたいと考えていた⁽¹⁰⁰⁾。弘一法師が仏典を日本へ寄贈したことの意味もまた、ここに集約されていると言える。弘一法師は優れた仏典を日本に寄贈することで、仏法を広め、無益な殺戮が一刻も早く終わることを願っていたのではないだろうか。

また弘一法師は、仏典の寄贈を通じて中国の文化的優越性を日本に再度認識させ、中国の国際的地位が回復、向上することも願っていたであろう。これについては後述する。

六、日本からの仏典購入

次に、日本からの仏典購入について述べたい。弘一法師は一九三四年から一九三六年にかけて、明末清初に刊行された經典を中心に、日本から一万冊以上を購入している。弘一法師が専ら利用したのは、当時名古屋にあった仏書専門の古書肆、其中堂である。其中堂は他の古書肆同様に一九〇〇年頃から古書販売目録を発行していたが、弘一法師もこの目録を利用していた。⁽¹⁰¹⁾ 其中堂は前述の文求堂や大阪の鹿田松雲堂と並んで、中国から漢籍や書画を直接購入した業者の一つである。その背景としては、清朝滅亡後に皇族や高官らの家蔵の貴書珍籍が市場に流出したことや、二〇世紀初めに敦煌で発見された大量の古写経、古写本が北京への移送と前後して民間にかなり漏出したことなどが挙げられる。⁽¹⁰²⁾

弘一法師の購入した仏典の一部は『仏学叢刊』や『仏学叢書』などにも収録され、初学者の研究に供された。⁽¹⁰³⁾ 弘一法師が日本から仏典を購入し、中国の僧侶や信者に広く紹介したのは、中国の仏教界の学問的水準の向上を願ったからに他ならない。それは当時の中国仏教界の置かれていた危機的状況の反映でもあった。当時、太平天国の乱により寺廟は破壊され、また仏教界は頹廢の極みにあった。居士仏教の代表的存在である楊文会（一八三七—一九一一）らの活躍によって命脈を保っていたが、中体西用論が活発化するにつれ、寺廟の土地や建物などの財産を没収して学校を建設し、新式教育を興そうという極端な廢仏政策、廟産興学が行われるようになった。危機意識を抱いた仏教関係者は、仏教界の組織化や教育施設の設立に着手した。しかし、辛亥革命後の新しい社会に仏教は不要であるという

社会風潮の下、仏事や民間の宗教儀礼は迷信的であるとされ、寺院に対する破壊活動が各地で行われた。仏教に対する偏見と迫害はその後ますます激化し、一九二九年には南京政府が「寺廟管理条例」を公布して廟産興学を全面的に支持するに至った。⁽¹⁰⁴⁾ 仏教界全体の学問的水準を高め、社会の崇敬を取り戻すことは、まさに仏教界の存続に関わる喫緊の要事であった。

また中国をめぐる当時の国際環境を考えると、中国仏教界の学問的水準を高め、それを日本や欧米列強に知らしめることは、中国を文化国家として認識させ、中国の国際的地位を高めることでもあった。これは、弘一法師が日本に仏典を寄贈したことの理由の一つとも考えられる。

弘一法師のこうした思いは、一九二八年に廈門南普陀寺で知り合ってから以来、その学識を高く評価していた芝峰法師⁽¹⁰⁵⁾（一九〇一—一九七二）に宛てた、以下の書簡にも強く表現されている。

日本の学者の著作は、条理については見るべきものがあります。しかし仏学面での業績は甚だ浅薄です。もしあなたが将来、学業を成し遂げたならば、あなたの著作の前に日本人は必ずやひれ伏して拝み、心から敬服するでしょう。あなたの著作を西洋の言語に翻訳して、欧米に広めるのもよいでしょう。（中略）学問に優れ、太虚法師の衣鉢を継ぎ、仏法を世に広め、著述を日本や欧米に伝えることが出来るのは、そして私の存じ上げる方の中で、私が最も崇敬するのはまさにあなたなのです。

ここまで、仏典の日本への寄贈と、日本からの仏典の購入という二つの面から、弘一法師と日本との関係について見てきた。この二つの活動を通じて弘一法師が意図したのは、一つには中国仏教界の水準を高め、仏教の中国社会での地位を向上させることであり、そしてまた一つには中国が文化国家として国際社会で認められることであった。弘

一法師のこうした思いの背景としては中国の弱体化と、それに乘じて日本や欧米列強が中国へと進出したことが挙げられよう。仏教面での弘一法師と日本の交流は、日本の中国進出に端を発するものの、中日両国における仏教の護持と伝播という意味で一定の成果を上げた。

最後に、弘一法師と内山完造との交流について述べておきたい。弘一法師は仏典の日本への寄贈や其中堂への支払い、仏典以外の日本書の購入など、書籍に関する日本とのやり取りを、ほとんどすべて内山完造に依頼している。その理由として、一つには当時の日中情勢が挙げられる。当時、上海には内山書店以外にも日本人経営の書店として日本堂、申江堂、至誠堂の三軒があった。しかし、内山書店は中国人にとって特別な存在であった。内山完造は當時を回顧して、次のように述べている。

いかなる排日の最中でも私の店に中国人客の無い日はなかった。いかに排日が猛烈な時でも、私の店から出す小包郵便や代金引替小包の取扱いを拒絶されたことはなかった。⁽¹⁰⁶⁾

また、弘一法師が内山完造に諸事を依頼したもう一つの理由として、弘一法師と内山完造の相互の信頼と尊敬が挙げられよう。弘一法師は宗教を問わず、敬虔な信者には一様に敬意を抱いていたが、中でも顧客の国籍や立場に関わらず、キリスト教精神に基づき、誠実な対応を続けた内山完造に対する敬意は格別であったろう。また内山完造が労働の煩雑さを厭うことなく弘一法師に尽くしたのは、名僧弘一法師に対する崇敬の思いに加え、仏学および宗教への敬意、そして弘一法師の愛国心に対する共感に由来するのではないだろうか。

1 本稿では、出家以前は「李叔同」、出家後は「弘一法師」と表記する。

- 2 梁啓超『清代學術概論（共学社史学叢書 中国學術史第五種）』商務印書館、一九二二年、一六四—一六五頁。
- 3 土屋英雄『現代中国の信教の自由——研究と資料』尚学社、二〇〇九年、五一—七頁、一四八頁。
- 4 以下、李叔同（弘一法師）の経歴については、主として林子青「弘一法師新譜」、『弘一大師全集』（修訂版）編輯委員会編『弘一大師全集』第一〇冊、福建人民出版社、二〇一〇年、一一—一六二頁による。
- 5 科挙を受けるには、まず官設学校の学生（生員、秀才）であることが条件で、李叔同が受験したのはそのための入学試験である。
- 6 一八九七年、龔氏と結婚。准（一九〇〇年生）、端（一九〇四年生）の二子をもうけた。
- 7 袁希濂「余与大師之關係」、陳星編『我看弘一大師』浙江古籍出版社、二〇〇三年、一頁。沢本香子「書家としての吳禱」、『清末小説』第三二号、二〇〇九年二月一日。
- 8 黄炎培「我也来談談李叔同先生」、同上『我看弘一大師』、五頁（初出…『文滙報』一九五七年三月七日）。
- 9 中国蔡元培研究会編『蔡元培全集』第一五卷、浙江教育出版社、一九九八年、三五五頁（日記…一九〇一年八月一日）、三七四—三七五頁（日記…一九〇一年二月二十九日）。黄世暉記「蔡元培口述伝略（上）」、蔡建国編『蔡元培先生紀念集』中華書局、一九八四年、二五二頁。
- 10 「盛宣懷…奏請籌設南洋公学 光緒三十二年九月二十五日（一八九六年一〇月三二日）」、「盛宣懷…奏為籌集商捐開辦南洋公学（附章程）」光緒三十四年四月二十四日（一八九八年六月二二日）、湯志鈞・陳祖恩編『中国近代教育史資料滙編 戊戌時期教育』上海教育出版社、一九九五年、一六三—一七〇頁。
- 11 蔡元培「我在教育界的經驗」、前掲『蔡元培先生紀念集』二四二頁。
- 12 「貴州学政嚴修奏請設經濟專科摺 光緒三十三年二月二十三日（一八九七年二月一六日）」、前掲『中国近代教育史資料滙編 戊戌時期教育』二八—三〇頁。

弘一法師（李叔同）と日本

- 13 中村哲夫「科挙体制の崩壊」、野沢豊・田中正俊編『辛亥革命 講座中国近現代史 第三巻』東京大学出版会、一九七八年、一二六—一四三頁。嚴修自訂、高凌雯補、嚴仁曾增編『嚴修年譜』齊魯書社、一九九〇年、一〇一頁、一二四頁、二七八頁、四九二頁。
- 14 「上論…命挙経済特科、各省各挙所知保薦人材」、前掲『中国近代教育史資料滙編 戊戌時期教育』三六頁。
- 15 五十嵐正一「中国近世教育史の研究」、國書刊行会、一九七九年、四一三頁。
- 16 前掲、『弘一大師全集』第一〇冊、三〇頁。
- 17 この時、李叔同は「監生」の資格で受験している。清朝の「監生」には、金銭で資格を購入した「例監」も多く見られたが、李叔同の場合はおそらく、経済特科への推薦制度を有する南洋公学特班が中央の国立学校に準ずると見なされていたためであろう。前掲「弘一法師新譜」、二九頁。
- 18 前掲「蔡元培口述伝略（上）」、二五二—二五三頁。
- 19 黄炎培「吾師蔡子民先生哀悼辭」、前掲『蔡元培先生紀念集』五三—五四頁。
- 20 前掲『蔡元培全集』第一五巻、一四九頁（日記…一八九七年一〇月一七日）、二〇三頁（注四一）。
- 21 同上『蔡元培全集』第一五巻、一八二頁（日記…一八九八年六月一七日）。劉建雲『中国人の日本語学習史——清末の東文学堂——』学術出版会、二〇〇七年、九四—九五頁。
- 22 同上『蔡元培全集』第一五巻、三八九—三九〇頁（日記…一九〇二年二月一七日）、三九三頁（日記…一九〇二年三月二一日）。
- 23 蔡元培「記三十六年以前之南洋公学特班」、中国蔡元培研究会編『蔡元培全集』第八巻、浙江教育出版社、一九九七年、三二頁。
- 24 前掲「弘一法師新譜」三〇頁。読者「『法学門徑書』序」、耐軒「『法学門徑書』序」、前掲『弘一大師全集』第一〇冊、三六三頁。『國際私法』および『法学門徑書』の李叔同による訳文は前掲『弘一大師全集』第八冊、二二五—二二六頁に収録。尚、

『国際私法』の原著について、西槇偉は太田正弘等講、磯村政富編『十法講義』（東京書院、一九〇〇年）所収の「国際私法」と指摘している（西槇偉『中国文人画家の近代 豊子愷の西洋美術受容と日本』思文閣書店、二〇〇五年）。『法学門径書』については、原著者・原著ともに未詳。

25 http://www.fengshuimastery.com/chinese_gb/master_eu.html（二〇一一年六月二五日参照）。

26 板谷俊生「萌芽期の話劇と上海の学校とのかかわり」、『北九州市立大学国際論集』第五号、二〇〇七年3月、一〇頁。

27 熊月之・周武主編『聖約翰大学史』上海人民出版社、二〇〇七年、二四六頁。

28 李孟娟「弘一法師的俗家」、前掲『我看弘一大師』三一四頁。

29 オーストリア・ハンガリー帝国租界…一九〇二年開設、一九一七年中国が接收。李家は同租界内にあった。

30 「記追悼会」（天津『大公報』一九〇五年八月二日）、前掲『弘一大師全集』第一〇冊、一六七頁。

31 同上『大公報』には、追悼会には「高等工業学堂顧問宮（官の誤りか…大野注）藤井君、松長君」が参列したとある。尚、「藤

井君」については、現段階では該当者の特定は難しい。同校校医の藤田語郎、あるいは直隸学務所（直隸初級師範学堂）の藤

井恒久の誤記とも考えられる。また厳修の天津での友人の一人に、藤井という名前の日本人がおり、同人が追悼会に参列した「藤

井君」の可能性も否定はできない。前掲『厳修年譜』一三二頁。

32 『東京美術学校校友会月報』第三卷第三号（明治三十七年十二月三日）。

33 東京芸術大学百年史刊行委員会編『東京芸術大学百年史——東京美術学校篇』第二卷、ぎょうせい、一九九二年、五八頁、

九七頁、二八〇頁。

34 山根幸夫「厳修の『東游日記』」、古典研究会編『汲古』第三〇号、五二一五七頁。

35 「張之洞…籌議論約束鼓勵遊学生章程摺（附章程）光緒二十九年八月一六日（一九〇三年一〇月六日）」、陳学恂・田正平編『中

国近代教育史資料滙編 留学教育』上海教育出版社、一九八一年、一二頁、五三一五九頁。

- 36 前掲『嚴修年譜』一三二頁、一五一頁。
- 37 前掲「余与大師之關係」二頁。尚、政法大学では一九〇四年に清国留学生法政速成科を開設した。
- 38 一九〇二年八月二日（新曆九月二二日）。前掲『嚴修年譜』、一四〇頁。
- 39 吉田千鶴子『近代東アジア美術留学生の研究——東京美術学校留学生史料——』ゆまに書房、二〇〇九年、一四五—一四八頁。
- 40 「清國人洋画に志す」『國民新聞』明治三十九年一〇月四日。
- 41 李叔同の日本での音楽活動については、以下に詳しい…西楨偉「中国新文化運動の源流——李叔同の『音楽小雑誌』と明治日本」、『比較文学』第三八巻、一九九六年、六二—七五頁。高媛「近代中国における音楽教育思想の成立——留日知識人と日本の唱歌」慶応義塾大学出版会、二〇一〇年、一三四—一六六頁。
- 42 春柳社については、以下に詳しい…陳凌虹「中国の早期話劇と日本の新劇——春柳社と民衆戲劇社を中心に——」、川本皓嗣・上垣外憲一編『一九二〇年代東アジアの文化交流』思文閣出版、二〇一〇年、一七一頁。飯塚容ほか編著『文明戲研究の現在——春柳社百年記念国際シンポジウム論文集』東方書店、二〇〇九年。瀬戸宏『中国話劇成立史研究』東方書店、二〇〇五年。
- 43 周遐寿『魯迅的故家』北京人民文学出版社、一九五七年、一九八—一九九頁。
- 44 欧陽予倩『自我演戯以来』中国戲劇出版社、一九五九年、一一頁、一四頁。
- 45 前掲『弘一大師全集』第八冊（一七四—一七五頁）には、京劇の舞台に立つ李叔同の写真（一九〇一年撮影）が収録されている。
- 46 前掲『東京芸術大学百年史——東京美術学校篇 第二巻』四六八頁。
- 47 白馬会出品目録には、李岸（李叔同）の作品として第一二回展（一九〇九年）に「停琴」、また最後の展覧会となった第一三回展（一九一〇年）に「朝」「静物」「昼」が記されている。石橋財団ブリジストン美術館ほか編『結成一〇〇年記念 白馬会——明治洋画の新風』日本経済新聞社、一九九六年、二三四頁、二三八頁、二四一頁、二四九頁。

- 48 Kao, Mayching "Reforms in Education and the Beginning of the Western-Style Painting Movement in China," in Andrews, Julia F. and Kuyi Shen, eds. *A Century in Crisis: Modernity and Tradition in the Art of Twentieth-Century China*. New York: Guggenheim Museum, 1998. p.156.
- 49 Habsmeier, Christoph. *The Cartoonist Feng Zhikai: Social Realism with a Buddhist Face*. The Institute for Comparative Research in Human Culture, 1984. p.18.
- 50 上海芸術大学：上海師範専科学校（創設者：李叔同の弟子である呉夢非・劉質平・豐子愷）と東方芸術専科学校（創設者：陳望道・周動豪）が合併して、一二九五年六月に設立された。一九二七年夏に経営難による校長の失跡や、同腹心の汚職が原因で学生運動が起り、学生の推薦によって、当時文学科主任をしていた田漢が校長に就任した。田漢の校長就任後は戲劇科が設置され、また欧阳予倩や郁達夫、徐志摩など文芸界の著名人がしばしば訪れ、同校は一時期、上海文芸界の中心的存在であった。
- 51 中華芸術大学：一九二五年一二月、陳望道・陳抱一・丁衍鐸ら上海芸術大学の教師の支持を受けて、同校の一部の進歩的學生が退学して、新たに設立した芸術学校。中華芸術大学では校長を置かず、委員制を施行。陳望道が同校行政委員会主席を、夏衍が教務長を務めた。
- 52 中共上海市委党史資料徵集委員會・中共上海市委党史研究室・中共上海市委宣傳部党史資料徵集委員會合編『上海革命文化大事記（一九一九・五一—一九三七・七）』上海書店出版社、一九九五年。前掲『中国文人画家の近代：豐子愷の西洋美術受容と日本』四二頁、六六頁。
- 53 陳野『縁縁堂主 豐子愷伝』浙江人民出版社、二〇〇三年、四九頁。
- 54 蔡元培「以美育代宗教説」、蔡元培著・中国蔡元培研究会編『蔡元培全集』第三卷、浙江教育出版社、一九九七年、五七—六四頁。

- 55 Barne, Geremie. *An Artistic Exile: A Life of Feng Zikai (1898-1975)*. California: University of California Press, 2002, p.119.
- 56 汪向榮著、竹内実ほか訳『清国お雇い日本人』朝日新聞社、一九九一年、七八頁。
- 57 前掲『近代東アジア美術留学生の研究——東京美術学校留学生史料——』四四—五一頁。
- 58 前掲『自我演戯以来』一一頁。
- 59 前掲『弘一大師全集』第八冊、二六九頁。
- 60 同上、二六九頁。
- 61 同上、二七五頁。
- 62 前掲『近代東アジア美術留学生の研究——東京美術学校留学生史料——』三五—三六頁。
- 63 前掲『弘一大師全集』第八冊、四—一〇頁（『芸術談』『女学生』第一期、第三期、一九一〇年四月—同七月）。
- 64 李叔同が天津を離れ上海へと向かった理由としては、仕事内容や実家の破産、家庭の事情（李叔同は天津の実家に妻子がいたが、帰国に際して日本人女性を同行）など、幾つか考えられる。上海では主として同盟会系の活動に従事していることから、李叔同が直隸模範工業学堂を辞職した理由の一つとして、同年二月に中華民国の臨時大總統に就任した袁世凱と同校との関係を嫌ったとも考えられる。
- 65 坂元ひろ子『連鎖する中国近代の「知」』研文出版、二〇〇九年、三〇四頁。
- 66 曾孝谷が李叔同らの紹介で、南社に正式に加入するのは四月二二日である。金梅『李叔同影事』百花文芸出版社、二〇〇五年、一四七—一四八頁。
- 67 柳亜子『南社紀略』開華書局、一九四〇年、四七—五二頁。
- 68 前掲『弘一大師全集』第一〇冊、四五頁。
- 69 op. cit. *An Artistic Exile: A Life of Feng Zikai (1898-1975)*, pp.28-29.

- 70 前掲『中国文人画家の近代 豐子愷の西洋美術受容と日本』二四—二七頁。
- 71 豐子愷「李叔同先生的教育精神」豐陳宝・豐一吟編『豐子愷文集』第六卷、浙江文芸出版社・浙江教育出版社、一九九六年、五四—五四二頁。
- 72 沈本千「湖畔同窓学画時——憶豐子愷」鐘桂松・葉瑜蓀編『写意豐子愷』杭州・浙江文芸出版社、一九九八年、一二三頁。
- 73 欧阳文彬「夏丏尊先生年表」、夏丏尊『平屋之輯』浙江人民出版社、一九八三年、九—一二頁。
- 74 同校はまず音楽科から始まり、一九二四年に規模を拡大して上海芸術師範大学と改称した。一九二五年には経営難から陳望道や周勤豪らの創設した東方芸術専科學校と合併して、上海芸術大学となった。
- 75 前掲『上海革命文化大事記（一九一九—一九三七）七頁。
- 76 李叔同の神経衰弱と出家については、前掲『連鎖する中国近代の「知」』三二—三三頁に詳しい。
- 77 弘一法師述・高勝進筆記「我在西湖出家的經過」、釈弘一「断食日志」、前掲『弘一大師全集』第八冊、一九三—一九八頁。
- 夏丏尊「弘一法師之出家」、前掲『平屋之輯』二四六—二四七頁。出家の経緯など、詳細は陳星『李叔同西湖出家実証』杭州出版社、二〇〇八年にも詳しい。
- 78 滕復『一代儒宗——馬一浮伝』杭州出版社、二〇〇五年。
- 79 道宣『江蘇省鎮江の人。俗姓は錢氏。日本では南山律宗を日本にもたらした鑑真（六八七—七六三）を「律祖」、開祖の道宣を「高祖」と称する。
- 80 劉晨「弘一大師与福州鼓山展蔵古経考述」、弘一大師・豐子愷研究中心編『如月清涼・第三届弘一大師研究国際學術會議論文集』中国廣播電視出版社、二〇一〇年、一三三頁。
- 81 釈弘一「致劉質平 六〇」（一九三二年六月下旬）、前掲『弘一大師全集』第八冊、二九二頁。
- 82 陳祖經「弘一大師在恩州」、余涉編『漫憶李叔同』浙江文芸出版社、一九九八年、一八六頁。

弘一法師（李叔同）と日本

83 当時の七百元は、上海における典型的な五人家族（一般市民家庭）の平均月収約一〇ヶ月分に相当する。陳明遠『文化人与錢』百花文芸出版社、二〇〇〇年、七三一七八頁。

84 前掲『李叔同影事』一〇九—一一四頁。

85 内山完造「小晚餐会」『花甲録』岩波書店、一九七五年、三七四頁。

86 内山完造「弘一律師」『上海羣語』大日本雄弁会講談社、一九四二年、六一—六三頁。

87 前掲「致劉質平 六〇」二九二頁。

88 常盤大定『支那仏教史蹟記念集』仏教史蹟研究会、一九三二年、二三一頁、二四八頁。

89 前掲「弘一大師与福州鼓山巖藏古經考述」二二九頁。内山完造「老師生西」『上海汗語』華中鉄道總裁室広報室、一九四四年、一四六頁。

90 釈弘一「致夏丐尊 三一」（一九三〇年十二月二日）、前掲『弘一大師全集』第八冊、三一頁。尚、引用文中の圈点は弘一法師による。

91 蘇慧純…福建晉江の人。若くして仏教を信仰。南洋で商売に従事していたが、帰国後は弘一法師や太虚法師らに仕えた。晩年、上海で大法輪書局を経営し、弘一法師と豐子愷の宿願であった『護生画集』第三集を出版した。

92 釈弘一「致豐子愷 一一」（一九二九年旧八月二九日）、前掲『弘一大師全集』第八冊、三七二頁。

93 高岩勘次郎…一九〇五年頃から上海滞在。熱心なキリスト教徒で、日本基督教会上海日本人基督教会の創設者。一九二〇年代に高巖洋行を設立し、中国の政府機関を相手に手広く商売を営んだ。高岩とみ『火宅の母の記』新潮社、一九七八年。『大阪時事新報』一九三一年二月二四日。

94 田中慶太郎…字は子祥、号は救堂。東京外国語学校漢語科を卒業後、京都にあった文求堂を東京に移す。書画や篆刻にも詳しく、書誌学を中心とする学識の該博で知られた。また東京の店には郭沫若や周作人、郁達夫など、中国の著名作家らが出入

りし、サロンの様を呈していた。反町茂雄『紙魚の昔がたり 明治大正篇』八木書店、一九九〇年、四二頁。

95 釈弘一「致林贊華 二」(一九三二年正月一日)、前掲『弘一大師全集』第八冊、四〇―四〇二頁。

96 前掲「弘一律師」六六―六七頁。内山完造は、一九三二年の第一次上海事変後に「京都市郊外の小倉村」(現京都府宇治市小倉町)に疎開していた折、散歩がてらに訪れた黄檗山萬福寺にたまたま寄贈するに至ったと記している。その所蔵はこれまでに確認されていなかったが、この度、萬福寺のご協力により所蔵が確認された。ここに感謝の意を表する。尚、萬福寺は日本黄檗宗の大本山であるが、その開祖、隠元禪師は弘一法師の信奉する南山律宗の祖、鑑真和上の再来ともいわれている。また弘一法師の整理した『華嚴經疏論纂要』の撰述者である道霈は、隠元禪師の嗣法者の一人である。こうしたことから、日本に移入した『華嚴經疏論纂要』の中でも、特に弘一法師の所蔵品を萬福寺に寄贈した理由として、内山自身の記述するような単なる偶然とは考えにくい。これについては稿を改めて考察したい。

97 弘一法師から内山完造への手紙については完造の甥で、現在の同書店社長である内山離氏から資料を提供していただいた。ここに感謝の意を表する。

98 前掲「弘一律師」六二頁。

99 釈弘一「致豐子愷 六」(一九二八年旧曆八月二二日)、前掲『弘一大師全集』第八冊、三六八頁。

100 釈弘一「致豐子愷 四」(一九二八年旧曆八月一日)、同上、三六六頁。釈弘一「致李圓淨 四」(一九二八年旧曆八月二一日)、同上、三七八頁。

101 釈弘一「致日本名古屋其中堂書店」(一九三六年春)、前掲『弘一大師全集』第八冊、四九八―四九九頁。釈弘一「致夏丐尊五四」(一九三六年正月初八日)、「同 五七」(一九三六年三月)、「同 六四」(一九三六年重陽節前)、同上、三一五―三一七頁。釈弘一「致高文顯 九」(一九三六年旧五月)、同上、四〇六頁。

102 前掲『紙魚の昔がたり 明治大正篇』四二頁、五二六頁。反町茂雄『一古書肆の思い出』平凡社、一九九八年、二〇―二二

〇二頁。

103 『仏学叢刊』『仏学叢書』…世界書局の総編集長であり、敬虔な仏教徒の蔡巧因が弘一大師の指導を受けて一九三六年に創刊

した。釈弘一「致蔡巧因 八四」（一九三六年閏三月二八日）、前掲『弘一大師全集』第八冊、三五二頁。

104 末木文美士・曹章祺『現代中国の仏教』平河出版社、一九九六年、三〇—三一頁。

105 釈弘一「致芝峰法師 三」（一九三二年）、前掲『弘一大師全集』第八冊、四六一頁。釈弘一「南閩十年之夢影」、同上、二

〇—二〇三頁。

106 前掲『花甲録』一二二—一二三頁。

107 豐子愷「縁」、豐陳宝・豐一吟編『豐子愷文集』第五卷、浙江文芸出版社・浙江教育出版社、一九九六年、一五四—一五六頁。

本研究は科研費（基盤研究(C)二三五二〇四一九）「李叔同（弘一大師）をめぐる日中文化交流の研究…中国の近代化と日本」の助成を受けたものである。

弘一法師（李叔同）與日本

——清末民初中日文化交流之一例——

大 野 公 賀

近代東亞對西洋文化的接受也是給自己帶來新思想、新物象的過程。然而，因其近代化的形成完全受制於外部壓力，諸多問題便隨之而來。在如此情形之下，日中兩國是如何分別構築自我，並陷於無奈的糾結？日本力圖形成自己的近代化國民國家，但未認可其他亞洲國家擁有同樣的權利，強行要求這些國家隸屬於自己。另一方面，中國為了實現近代化，卻不得不借鑑對自己推行殖民擴張的日本的经验。

拙論選取清末至民國時期中日交流的一個案例，聚焦於有日本留學經驗的高僧弘一法師（1880-1942：法名釋演音、俗名李叔同），闡釋其思想與活動。弘一法師在1918年出家之前，作為近代中國接受西洋文化的先驅廣為人知。而他的驟然出家則被視為向傳統的回歸，給中國文藝界帶來不小的衝擊。

向來，西洋文化與佛教分別象征近代與傳統，一直被視為完全相反之物。因而對弘一法師出家前後的活動分而述之的做法較多。有關其同日本的關係，也大多僅關注出家之前，即李叔同時代的活動，出家之後則鮮見論述。因此，拙論同時考察其出家前後同日本的交流，從而試圖闡明李叔同（弘一法師）對社會變革所持有的一貫思考，以及日本在其中所起的作用。